

日本医史学会6月例会

令和5年6月24日(土)
オンライン開催

1. 「海上随鷗(稲村三伯)の医書と造字について」
西嶋佑太郎(京都大学大学院博士後期課程)
2. 「日本における結核療養所の変遷」
青木純一(日本女子体育大学 特任教授)

例会抄録

中世日本にみる歯科医療事情

西巻 明彦

1. はじめに

日本の歯科医学は、幕末から明治にかけて欧米の歯科医学が入ってきたことにより現代の歯科医学が誕生したと言われる。世界史的にはフランスのピエール・フォシャールが『歯科外科医』(1728)を出版したことが、近代歯科医学の始まりと言われている。歯科医学そのものはフランスでは発達せずアメリカへ渡り、1839年ハイデン、ハリスにより世界初のボルチモア歯科医学校が誕生している。日本には主にこのアメリカ歯科医学が伝来してきたが、この伝来は複雑な受容形態を示している。このため日本における幕末以前の歯科医学史はその前史として取り扱う場合が多い。従来、前史として考えられていた中世日本の歯科医学史を、現代とどのように結びつけるかを中心に論考を行った。

2. 中世歯科医療の分類

中世日本の歯科医療はさまざまな職種において行われていたと考えられる。便宜的に内科的歯科医療、外科的歯科医療、技術的歯科医療、予防的・習慣的歯科医療として分類を試みた。

内科的歯科医療とは口腔に対して当時の医師、口中医、僧医が行っていたと考えられる薬物投与の内科的治療法である。一般にヒポクラテスでもガレノスにおいても、その医学書には口腔領域の病理、治療法が記述されているが、漢方医学書で

も同様である。その一例として梶原性全を取りあげると、『頓医抄』(50巻、鎌倉時代)の中で巻二十に口腔疾患が記載されており、この中の歯諸病については三十一方の処方載せられている。『頓医抄』は和文で書かれている普及版である。巻二十では『三因方』、『千金方』、『事證方』からの引用が多い傾向があり、口中書にも大きな影響を与えたと考えられるが、同時に医師や僧医も口腔疾患の治療についてもこの『頓医抄』が影響を与えたと考える。戸出一郎氏は『頓医抄』巻二十は口腔疾患の病理と治法を平易簡潔・親切丁寧に記述したもので、一読して性全が膨大な医書を狩猟し、自家薬籠中のものとしていた。」と述べている。内藤希哲の『傷寒雜病論類編』によれば口中医の診察範囲は口腔と咽喉で、現代で言うならば口歯咽喉科である。

外科的歯科医療は『小右記』長和3年正月8日に「主上御歯、以住京極辺之嫗令取給」とあり、『御堂関白日記』『明月記』にも歯抜き師の存在が記されている。抜歯は出血を伴う、いわば「穢」であるため、犬神人に近い階層が対応したのではと考えられる。『玉葉』では丹波経基が二人の小児の乳歯の抜歯を行った記述があるが、それは脱落寸前の乳歯の抜歯においては出血をほとんど伴わないことから「穢」にはあたらないとされていたとも考えられる。『吾妻鏡』にある頼朝の歯痛に丹波頼基は薬方で対応している。『抄石集』には奈良

に歯取り唐人がいると記されているが、唐人とは外国人であり、歯抜き師は常民と異なる階層と推察される。このため内科的歯科医療と、血を伴う外科歯科医療とは異なった階層と職種で行われていたと考えられる。

技術的歯科医療について、現在最古の顎粘膜吸着義歯は和歌山願成寺に残る1538年に亡くなった仏姫の木床義歯である。この研究報告は1976年であるが、それ以後進展はない。仏師が作成したという推測はあるが、それについての文献は見つけられていない。『二中歴』第十三巻に一能歴があり、網野善彦氏はこれを①官人的職能民、②官人に所属する職農民グループ、③芸能民、呪術民など、④普通の人とは異なる行為をする人、に分類しているが、医師と陰陽師は①に分類されており、仏師や大工は②に分類されている。『周礼、考工記』には「知者ハ物ヲ創リ、巧者ハ之述ベ之ヲ守ル。世ニ之ヲ工トイフ。百工之事皆聖人之作也。」とあり、職能民は「道々の者」として低い地位にあるが、木床義歯の制作者は医師より技術的

な傾向に強い職能民と考えることができる。

予防的・習慣的歯科医療とは主に庶民が日常的に行う楊枝や口漱ぎなどを指し、『日本霊異記』『九条殿御遺戒』（藤原師輔）では寺や貴族が楊枝を使っているが、『極楽寺殿御消息』（北条重時）をみると、武士階級に楊枝が広まっているのがわかる。『医心方』にみられる歯髓焼勺療法は戦後の沖縄の離島（沖縄県座間味村）で民間療法である「ちみやち」として残っていた。

3. 現代の歯科医師との関係

近世に入り、中世の異なった職種による歯科医療はそのまま引き継がれ、特に技術的歯科医療として木床義歯を制作する入れ歯師が職能民として近世に確立したと考える。幕末から明治にかけて欧米の歯科医療、特にDDS（歯科外科医）の思想が伝来すると、それまで異なった職種で行われていた歯科医療は、結果として西洋医学を主体とした近代的歯科医師として統合されたと思われる。

（令和4年12月6史学会合同例会）

博多人形師と解剖学

——博多人形師と九州帝国大学福岡医科大学校 解剖学教室 櫻井恒次郎教授 “美術解剖学”——

丸山マサ美

【緒言】

初期の解剖学的知識のほとんどは、宗教的または哲学的な質問のために発見され、バビロニア人は臓器で見つけたものに基づいて予測するために動物を解剖し、古代ギリシャ人は解剖学を使って魂の位置を熟考した。ギリシャ生まれの医師ガレン（西暦129–216年）の影響のある解剖学的研究は、ローマ帝国で人間の解剖が禁じられていたにもかかわらず、何百年もの間、ヨーロッパ医学を支配した。実際の解剖は、助手によって行われ、しかし、早くも1300年代には、ヨーロッパの大学は、医学生に公的な人間の解剖を提供し始めた。実際の解剖は、助手によって行われ、講師は、ガレンまたは、他の権威によるテキストから読み

取ったり議事録を観察していた。1500年代のヨーロッパのルネッサンスの間に初期の古典ギリシャ話のテキストに含まれる知識に新たな関心があった。解剖学自体の研究は、解剖のための手順を含む1531年のガレンの解剖学の手順の新しい翻訳を含む、いくつかの主要な作品の再発見によって促進された。実用的な解剖を通して、解剖学者は、そのような古典的なテキストのより良い理解を達成する事を目指した。これはフランドルの医師アンドレアス・ヴェザリウス（1514–64）が、彼の結果をガレンのような確立された権威の仕事と比較した時の意図であった。実際には、ヴェザリウスは多くの不正確さを発見した。ファブリカの正式書名は、De humani corporis fabrica Libri septem, 日